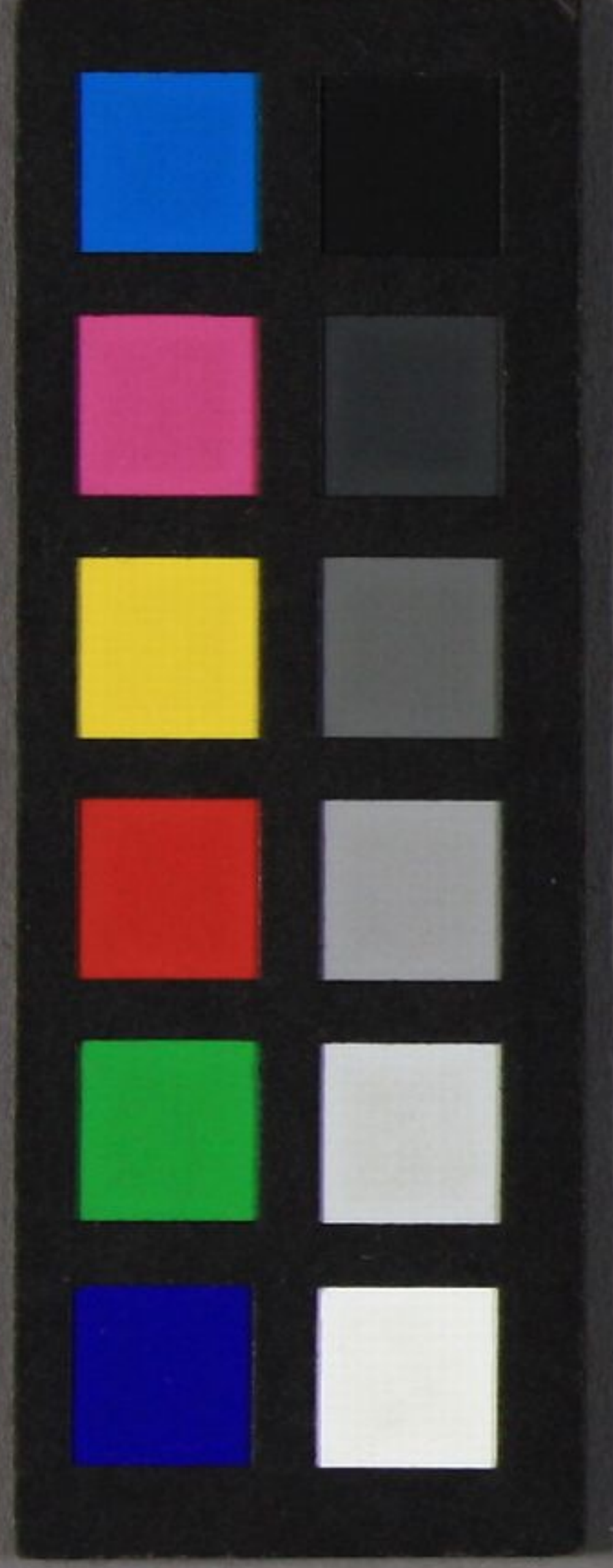


社會主義の詩





社會主義 傳道用小冊子

(十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す)

●百年後の新社會 堀利彦抄譯 價五錢

●理想郷 堀利彦抄譯 價五錢

●通俗社會主義 堀利彦譯述 價二錢

●普通選舉の話 西川光次郎著 價一錢

●社會主義問答 堀利彦著 價一錢

●社會主義小話 堀利彦編 價一錢

●小供の社會主義 深尾韶著 價一錢

發賣所 東京麹町區元園町一丁目二十七番地 由分社

明治卅九年四月八日印刷

明治卅九年四月十一日發行

價五錢

東京市麹町區元園町

一丁目廿七番地

編輯兼發行人 堀利彦

車京市麹町區有樂町

三 白一番地

印刷人 志津野又郎

東京市京橋區築地

二丁目廿一番地

印刷所 株式會社 國光社

發行所 東京麹町區元園町一丁目二十七番地 由分社



# 社會主義の詩

## 目次

別荘と公園	堺利彦(一)
血祭	原霞外(二)
ポンポコ歌	木下尙江(四)
戦争の歌	木下尙江(五)
富の鎖(曲譜付)	無名氏(八)
亂調激韻	中里介山(二〇)
我が行く道(曲譜付)	一六讀者(二三)

はしがき

社會主義わ如何なる人にも傳へなければならぬ。社會主義者わ、どんな階級、どんな種類、どんな職業にも侵入しなければならぬ。長き、不撓の戦いを續けんが爲にわ、人並の交際、娛樂、修養等も決して度外にするゝわ出來ない。此書、小なりと雖も、我が同志の雅懷、かゝる音樂詩歌の趣味を有し得るに於て、決して人後に落ちぬことを示すであらう。

三十九年三月

由分社同人

ちよつとお断りしておきます。此本の假名遣いわ少し考へあつて、わざと突飛な大改革をやりました。作者にわ誠に申譯のないとで。(深尾詔しるす)



二

ラサール……………武藏野守(一五)

血染の赤旗(曲譜付)……………某氏作(二七)

獄中の音楽……………堺利彦(一九)

赤色旗……………幸徳秋水(二三)

巢鴨の歌……………西川光次郎(二三)

秋水兄を迎ふる歌……………山口孤劍(二四)

自然の潮流……………無名氏(二六)

我等が世界……………一讀者(二七)

社會主義の詩

由分社編纂

別荘と公園 堺利彦

(半生の墓所載)

山 深く 水 清し。

老いたる人若き人

自由に遊ぶ温泉場

其の谷川の川岸の、

巖に立てる一少年

『成功秘訣』を手に持ちて、

慨然として嘆ずらく、

あー此の風景、愛すべし、

我が別荘に してしがな。

都の美女を携へて、

我獨り來て遊ぶべく。



門 高く塀 長し。

盛装の人、車馬の人、

競いて入り来る大邸宅。

其の裏庭の生籬の、

外面に立てる一少女、

小き妹の手を取りて、

愁然として嘆ずらく、

わー此の風景、美しや、

善き公園に してしがな。

知るも知らぬも打連れて、

食わずに生きて居らりよーか、

どーせ死ぬなら此の怨み、

晴して死のー、喃、太郎作よ。

《太郎作》

ほんに老爺の言うとりり、

年が年中膏汗、

雨の朝に、風の夜に、

苦勞さんざん、其上で、

やツと果報の實が出来りや、

ソレ年貢！

皆共に来て遊ぶべく。

血 祭

原 霞 外

(平民新聞第四十二號所載)

《老爺》

お代官とて容赦があるか、

こーなるからわ百年目

百姓 じやとて人じやもの、

ヤレ何じやのと嘘たれて、

片ツ端から奪り立てる。

厭じやと言へば眞ツ二つ。

代官様わ強盗じや。

喃芋作よ、然じやないか。

《芋 作》

そんな繰言いおーより、

もう糞焼だ。鋤に鋏、

蕙の旗に竹の槍、

攻め太鼓わ誰が打つ。



ほら貝吹くわ己が役。

(老爺)

先づ腕試し、膽試し。

村の難儀を知らぬ顔、

代官にへつらう庄屋奴の、

白髪ツ頭を引ン抜いて、

門出の血祭、さー、ついで。



金鷄勳章？

否え 否え 違います。

可愛い兵士の髑髏！

ポコ ポンポコポンポコ ポン。

お金持衆の杯に光わ何ですえ。

シヤンペーン？

否え 否え 違います。

可愛い工女の血の涙？

ポコ ポンポコポンポコ ポン。

ポンポコ歌 木下 尙江

(良人の自白上篇所載)

華族の妾の頭に光わ何ですえ。

ダイヤモンド？

否え 否え 違います。

可愛い百姓の油汗！

ポコ ポンポコポンポコ ポン。

大臣大將の胸に光わ何ですえ。

戦争の歌 木下 尙江

(平民新聞第三十一號所載)

△青山墓地にて

山櫻、

散るを譽れと歌われし、

『軍神』のあと来て見れば、

五月雨暗き原頭に、

標の杭わ白けれど、

風に花輪の骸亂れ、



は調  $\frac{4}{4}$ (key G) 富の鎖 曲“日本海軍

(一)  $\underline{5.5}$   $\underline{5.3}$  |  $\underline{5.5}$   $\underline{1.1}$  |  $\underline{2.1}$   $\underline{2.3}$  |  $\underline{2.0}$  |  
 トー ミ ノ ク サ リ ナ ト キ ス テ テ

(二) や ま を も い め く だ い り き に

$\underline{1.1}$   $\underline{2.2}$  |  $\underline{6.6}$   $\underline{5.5}$  |  $\underline{3.3}$   $\underline{5.5}$  |  $\underline{2.0}$  |  
 シ ユー ノ ク ニ ニ イ ル ワ イ マ て

て ん ち も ど よ む こ え あ げ て

$\underline{3.5}$   $\underline{3.5}$  |  $\underline{6.6}$   $\underline{6.5}$  |  $\underline{3.5}$   $\underline{3.5}$  |  $\underline{6.0}$  |  
 タ ダ シ キ キ ヨ キ ウ ツ ク シ キ た

う た え や ひ る き あ い の う た

$\underline{1.1}$   $\underline{2.2}$  |  $\underline{3.3}$   $\underline{1.1}$  |  $\underline{6.6}$   $\underline{2.2}$  |  $\underline{5.0}$  ||  
 トー モ ヨ テ オ ト リ タ ツ ワ イ マ ち

す す め や な お き ひ と の み ち

戦争五箇月ならずして、  
 大將七人はや現われぬ。

△新大將

雨の青山訪う影も無し。

都人士の歌わ花より先に枯て

涙とばかり露の滴る。

青葉の袖に打ち掩い、

心ありてや、ま榊の

いともあらかの墳墓を、

寡婦と孤兒とわ數知らねど、  
 餓芋わ地上に充滿てり。

△召集兵

残る妻子や白髪の親の、

明日を思えば心が裂ける。

名譽名譽と騒いで呉れな。

國の爲との世間の義理で、

何も言はずに只だ目を閉じて、

涙かくして死に行く。



富の鎖

讀者

(平民新聞第五十六號所載)

富の鎖を解き棄て、  
自由の國に入るわ今。  
正しき清き美しき、  
友よ手を取り 立つわ今。

山をも い抜く 大力に、  
天地も どよむ聲あげて、

勵むわ近き今日の業、  
望むわ遠き世の光。

砲よ劍よいつまでも、  
國と國とわ せめげども、  
我等は常に同胞の、  
四海友なる天の民。

頼むわ結ぶ手の力、  
かざすは高き義の心。

歌えや 博き愛の歌。  
進めや 直き人の道。

八

迷信 深く地に入りて、  
拓くに難き茨道。  
毒言辛く襲うとも、  
毒手苦しく責むるとも。

我が身わ常に大道の  
ソーシヤリズムに捧げつ、

富よ位よ地を占めて、  
よし 今 ひとり荒ぶるも。

滴たる汗に誠あり、  
打ちふる小手に命あり。  
行かで止まめや 此の歩み、  
成さで止まめや 此の叫び。



九



亂調激韻

中里 介山

(平民新聞第三十九號所載)

鍛投て、我今日出立つ故山の圃。  
籬に凭りて我を送る老たる母。  
白髮愁長くして老眼涙あふる。  
慇懃、袖を引く、我がうない子。  
無心、彼わ知らず、父が死出の旅。  
我が腸斷つと云わんや、  
國の爲なり、君の爲なり。

森森煙波三千里、  
東、郷關を顧みて我が腸斷つ。  
西、前途を望めば夏雲累々。  
泣かんか、笑わんか、叫ばんか。  
一夜、舷を叩いて月に對す、  
あー我、怯なりき、  
懷わ横槊高吟の英雄に飛ばず。  
家郷を憶うて涙雨の如し。  
我豈泣かんや、  
國の爲なり、君の爲なり。

さらばよ、我が鍛とりし畑。  
さらばよ、我が鋤洗いし小川。  
我を送る郷關の人、  
願ば、暫し其『萬歲』の聲を止よ。  
静けき山、清き河、  
其の異様なる叫びに汚れん。  
萬歲の名に依て、死出の人を送。  
我豈憤らんや、  
國の爲なり、君の爲なり。

落日斜なる荒原の夕、  
満目に横う伏屍を見よ、  
夕陽を受けて色暗愴。  
夏草の闇を縫うて流る、  
其の腥き人の子の血を見よ。  
敵、味方、彼も人なり、我も人も。  
人、人を殺さしむるの權威ありや。  
人、人を殺すべきの義務ありや。  
あー言ふこと勿れ、  
國の爲なり、君の爲なり。



と調  $\frac{2}{4}$  (key G) 我が行く道 作曲者 白鳩生

\*  
5. 5. 1. 2. | 3. 3. 3. | 5. 5. 3. 1. 2 0 |  
(一) リ ガ ユ ク ミ チ リ マ エ ニ ア リ  
タ 子 ナ マ ク ベ ク ヒ ロ ム ベ ク

5. 5. 1. 2. | 3. 3. 3. | 5. 3. 2. 3. | 1 0 ||  
リ ガ ユ ク ミ チ リ マ エ ニ ア リ  
メ ナ フ カ ス ベ ク ソ ダ ツ ベ ク

2. 2. 2. 5. | 1. 3. | 4. 3. 2. 4. | 3 0 |  
ア レ タ ニ ツ チ ナ カ エ ス ベ ク

5. 3. 2. 1. | 2. 1. 6. | 5. 3. 2. 3. | 1 0 \*||  
カ レ キ ニ オ ノ ナ フ ル ウ ベ ク

我が行く道

無名氏

(直言第二卷第十六號所載)

(一)

我が行く道わ前にあり。  
我が行く道わ前にあり。  
荒れ田に土を反すべく。  
枯れ木に斧を揮うべく。  
種を播くべく、擴むべく。  
芽を吹かすべく、育つべく。

(二)

我が行く道わ前にあり。  
我が行く道わ前にあり。  
劍の山も歩むべく。  
炎の海も潜るべく。  
暗を逐うべく、破るべく。  
光待つべく、迎うべく。

(三)

我が行く道わ前にあり。  
我が行く道わ前にあり。



貧富の國を逃るべく。

自由の國に走るべく。

鎖切るべく、放つべく。

手を握るべく、振うべく。

(四)

我が行く道わ前にあり。

我が行く道わ前にあり。

野に樂園を現すべく。

地に天國を築くべく。

主義叫ぶべく、傳うべく。

身を捧ぐべく、進むべく。

(五)

我が行く道わ前にあり。

我が行く道わ前にあり。

朝にわ 俱に稼ぐべく。

夕にわ 俱に遊ぶべく。

國開くべく、助くべく。

人愛すべく、睦むべく。

ラサール

武藏野守

(平民新聞第四十六號所載)

『金風清き』 ブレスラウに、

彼 安らげく眠れり』と

昔を偲ぶ人の歌、

地下なる君に通うらん。

大なる主義を天に得て、

熱血の子と生れしが、

あー 『労働』の友として、

君が運命わ辛かりき。

さわれ凝りたる一念に、

君が息吹し紅熱花、

やがて火花と咲き出で、

『平和』の風に微笑まん。

濁り江ながら、赤心に

花を培養う人もあり。

(秋わ奥津城 冷もせめ。

君が眠りわ やすかれな。)



と調<sup>2</sup>/<sub>4</sub> (key G) 血染の赤旗 曲“四百餘州”

5̣ 5̣ | 1 — 3̣ 2̣ 1̣ 3̣ | 5̣ 3̣ 2 |  
 (一) ハク ワン フェー ナ ホコ ル  
 (二) ナン ゴ おそれん われ に

2̣ 2̣ | 3 1 4 3 2 1 | 2 — 0 |  
 ボー マン ムイ ノト ラ  
 たす 一の つるぎあ り

5̣ 5̣ | 1 — 3̣ 2̣ 1̣ 6̣ | 5̣ 0 |  
 セー ケン カレニア リ  
 るー どー せーぎの て

2̣ 3̣ 2̣ 1̣ 2̣ | 3̣ 1̣ 2̣ 5̣ | 1 — 0 ||  
 コーアングミン ワレ ナセ ム  
 だんけつして いざたた ん

血染の赤旗

某氏作

(直言第二卷第二十三號所載)

白腕富有を誇る、

傲慢無爲の徒等、

政權 彼に在り、

苟安 惰民、我を責む。

何ぞ恐れん、我に、

『多数』の劍あり。

労働 正義の手、  
 團結して いざ立たん。

見よや 血染の旗を、

そわ何？ 社會主義！

壓制不義の下、

俱に手を取りて立つ。

いざや勇みて道に、

誘わん 四方の民。



さらば行けよ、友、  
主義に身を捧げてん。

公有資本の組織、  
平等に分けて住む。  
安樂自由の身、  
犯すべき罪もなく。

人は正しき業に、  
勵みて樂しむ世。

國に仇敵もなく、  
人わ皆美しや。

### 獄中の音楽 堺利彦

(平民新聞第三十五號所載)

囚人 半月 天を見ず、  
囚人 半月 地を踏まず。  
されど自然の音楽わ、

樂わ不斷の音、  
胸に笑の絶間なし。

技藝わ開けて、智慧わ、  
はてなき大空に、  
振わん天賦の羽、  
徳の道 日に進む。

暗わ光に消えて、  
この世わ花の園。

自由にこゝに入り来る。

朝わ 朝日に雀鳴く。  
我が妻來れ、チユー チユー チユー。  
子等わ何處ぞ、チウン チウン チウン  
こゝに餌あり、チユク チユク チユク

夕わ 夕日に牛の鳴く。  
永き日 暮れぬ、モオ オオオ。  
務 終りぬ、モオオ オオオ。



いざや休やすまん、モオモオモオ。

夜よわ 夜よもすがら蛙かはず鳴く。

人ひとわ眠ねむれり、ロク ロク ロク。

世よわ我わが世よなり、レキレキレキ。

歌うたえや歌うたえ、カラ コロ コロ。

晴はれにわ 空そらに鳶とびの聲こゑ、

笛ふえ吹くかとぞ思おもわるゝ。

羽衣はごろもの袖そでふりはえて、

トトトータラリポ ポン ポン。

あー 面白おもしろの自然しぜんかな。

あー 面白おもしろの天地てんちかな。

### 赤色旗

幸徳 秋水

(直言第二卷第二十七號所載)

漢皇赫怒發六帥。朔邊大漠任驅

馳。烽火連年丁壯盡。老者轉壑

幼者飢。民生倒懸日既久。市朝

舞まうや 虛空こくうの三千里。

舞まいすまし、吹ふきすます。

ピーヒョロリピーヒョロリ。

雨あめにわ軒のきの玉水たまみづの、

鼓打つづみつかと思おもわるゝ。

緒をを引きしめて、氣きを籠こめて、

打うつや 手練しゅれんの亂拍子らんびょうし。

打うちはやし、打うちはやす。

只見盜賊滋。江河之下勢滔々。

世道今日誰能持。儒生報國文章

在。一管大筆任手揮。流涕曾獻

買生策。慷慨又成屈子辭。侃諤

買禍自古爾。志士何說一身危。

筆端忽觸有司怒。檻車直向城北

之。城北獄現八寒獄。寒威凜烈

欲劈肌。衣衾如鐵食如石。蒲柳

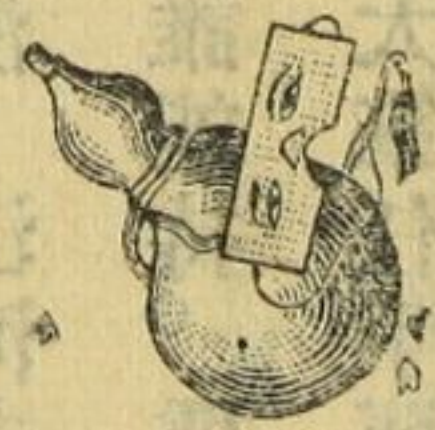
弱質何得支。胃腸壞爛病漸重。

偏苦湯藥下咽遲。此時賴有存一



氣。浩然沛然未曾衰。途窮則通  
勢極變。世路不須歎嶮巖。獄裡  
豈無一陽復。且喜造化恩光施。  
聳空石壁高十丈。猶是春風自在  
吹。數片落花蝶舞處。千山新綠  
鶻啼時。連霖晝寂唯披卷。涼月  
夜深好吟詩。飄然忘却物我境。  
不覺囚中日月移。屈指一百五十  
日。刑餘身兼病餘姿。肉落骨立  
形如鬼。蹒跚出門一笑奇。嗚呼

此身可繫手可縛。千秋正氣不可  
羈。由來活機暗中動。人心所嚮  
又奚疑。風雲之會決非遠。山河  
革命日可期。君不見露都冬宮風  
雪夕。王冠碎飛血淋漓。又不見  
鐵血宰相虐政日。布衣高揭赤色  
旗。



巢鴨の歌

西川光次郎

運動場の芝生に咲けるタンポポ  
に二人の囚徒春をたのしむ。

獄窓にうつる星影仰ぎつゝ、我な  
ぐさめぬ、夜のつれづれ。

小夜ふけて蛙の聲の聞ゆなり、  
夏の樂師のはやも出づるか。

目をさまし、思いにふける折か  
らに、獄の空にホト、ギス鳴く。

裏庭の鶯の新芽や出づるらん、  
そが紅葉せば我れ歸るなり。

桐の芽の日に日にのびる早さ哉  
何時までも續くものかわ五月雨



の、命にとても限りこそあれ。

明月や出歩きのならぬ此身哉。

### 秋水兄を迎ふる歌

山口 孤劍

(直言第二卷第二十六號所載)

愁の花を身にしめて、  
鐵窓により來る小雀に、

君も牢獄に囚われぬ。

亂れて燃ゆる友情の、  
胸の焰わ彩虹となり、  
君が榮譽の冠に、  
酌め一杯の葡萄酒わ、  
これ 労働者の血にあらず、  
友がやさしき涙なり。

我が身 小琴となしはて、

人の自由を泣にしも、  
夕の森に杜鵑啼きて、  
野路の若葉の朝露に、  
君を迎うるうれしさよ。

靈鷲 橄欖 いにしえの、  
聖者の經わ ありとても、  
斷頭臺わ 跡たえず。  
ドグマの黒き翼にぞ、  
眞理の谷わ霧ふかく、

祝の歌を うたわばや。  
銀の臺にあらずとも、  
愛に輝く 平民社。  
瑠璃の柱も、珠玉の扉も、  
清き心と いずれぞや。

さもわらばわれ、一杯を、  
友が情に酌めよかし。  
夜の女神の胸飾る、  
その瓔珞の星の花、



今宵 天降りて、同志等が、  
君を迎うる宴 たすけよ。

### 自然の潮流 無名氏

(平民新聞第五十六號所載)

たとえば春の白雪の、  
流れて谷を出づること、  
人の心に疑いの

塞がば塞げ、やよ 石よ。  
埋まば埋め、やよ 木葉。  
躍りて 瀧も面白し。  
せかれて 淵も興ありや。  
散りて、碎けて、川岸の、  
草葉に暫しかゝるとも。  
萬のしずく呼びつどえ、  
百千の川をあつめ來て、

氷の解けて流れてね、  
同じ自然の約束の、  
海に入らでね止まざらん。

石よ 殊更動きいで、  
など かく水の道に立つ。  
木葉よ更に散りしきて、  
など かく水の道をせく。  
連れよ 俱に、と願うにか。  
止めよ流れ、と防ぐにか。

こゝに木葉を押し流し、  
かしこに石をころがして、  
未わ望みの、漫漫の、  
かの大洋の上に行く。

### 我等が世界 一讀者

(直言第二卷第十九號所載)

(一)  
山にわ 滴る木々のみどり、



野邊にわ 波うつ稲のたり穂。  
町にわ 樂しき人の満ちて、  
我等が住家わ 園の如し。

うるわしき哉 我等が世界。  
やがて來ん、やがて來ん、  
我等が世界。

斷じて叫ばん 社會主義。

(二)

晝にわ 興ある日々の仕事、  
夜にわ 樂しき家のまどい。

朝より夕べを、樂の音に、  
我等が務めわ蝶の如し。

うるわしき哉 我等が世界。  
やがて來ん、やがて來ん、  
我等が世界。

進んで叫ばん、社會主義。

(三)

希望の日の影 道を照らし、  
平和のやわ風 胸に吹けば、  
瞳に 愁の雲もなくて、

心わ 晴れたる空の如し。

うるわしき哉 我等が世界。  
やがて來ん、やがて來ん、  
我等が世界。

忍んで叫ばん 社會主義。

(四)

天地親しき友の世にわ、  
抑ゆる者なき智慧の旅路、  
たくみわ自由の羽をのして、  
おもいわ空飛ぶ鷺の如し。



うるわしき哉 我等が世界。  
やがて來ん、やがて來ん、  
我等が世界。  
勇んで叫ばん 社會主義。



魔の極に破れんものか我が命泣く  
にわつらき情愛とく母(琴牛)

繪筆折りてゴルキーの手をとらん  
にわあまりに細き我腕かな(夢二)

君と我れ何のえにしぞ昨日今日送  
るに涙迎うるに涙(不知火)

財あらば疲れし猛士にかしづきて  
ゼ子バの湖畔月に笑まんを(不知火)

平和の繪筆とめて仰ぎみれば聖  
母マリアはゝゑみて立たす(無名氏)

心にわいだく情のあるものを敵と  
云ふ字のつらくもあるかな(平生)

ミレーの畫に題す

東天明を告げんとし  
木々の葉末の白玉わ  
肩に鋤もつ一農夫  
可愛の妻の手を取りて  
あたりまばゆき朝ほらけ  
額に汗を絞りつゝ  
うれきる夫の忙がしく  
夕日わ西に傾むけり  
今夜の菜わ何にせん  
オホーハハハハ

豊後 白雨星

烏は埒に羽ばたきし  
星と並びて光る時  
笹を頭に冠りたる  
共に畑に出で、ゆく  
日れもす打ちし其畑に  
種まく妻の忙がしく  
妻わ夫に曰ひけらく  
お前の好なわ焼豆腐